様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　23 年　4 月　26 日現在

機関番号：12601
研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2008～2012
課題番号：20246093
研究課題名（和文）　日本建築様式史の再構築

研究課題名（英文）The Reconstruction of the history of Japanese Architectural Style

研究代表者
藤井　恵介（FUJII KEISUKE）
東京大学・大学院工学系研究科・教授
研究者番号：50156816

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠

キーワード：建築様式、東アジア、住宅建築、寺院建築、禅宗様、大仏様、和様

１．研究計画の概要

（１）第一には、今まで達成されてきた「日本建築様式史」の全体の再点検を行う。太田博太郎氏の研究は、日本を代表する「建築様式史」として、多くの建築家、研究者が依拠してきたのだが、現在の段階では、時代背景の思想と関連付けて、研究そのものの動機を明らかにし、研究のもつ含みを明らかにすることが重要である。そこで提案された様式について、必要に応じて再定義を進めることが重要と考える。また、多くの疑問があって学術語の再定義ができない場合にも、それを解決するために必要な作業を見通しておく必要がある。
　具体的には現地調査と研究史整理の作業を行う。
（２）第二に、これらの検討結果を持ち寄り、分野を超えて議論を行い相互の関連を検討する。従来の日本建築史の分野では、ジャンルを超えて研究を行う慣例がほとんどなかった。例えば、寺院が「和様化」する、との表現はしばしば用いられてきたが、多くの場合寺院が住宅の要素を取り込んでいく過程のことを言っているようだが、これについて寺院史と住宅史の研究者が同一の場で議論を行うということはかつてなかった。各種の建築は、ある時代に同時に共存しているのであるから、そのような現象について、それぞれの分野の課題として取り込んで検討する必要がある。また、本来横断的な視点で開始されたはずの建設組織研究は、実はそれだけで完結してしまう傾向が強かった。今回の研究では、建築を造るという視点から、各ジャンルを横断的に取り扱う必要がある。
　具体的にはシンポジウムを開催して、積極的な討論を行う。
（３）第三に、これらの検討の結果を基礎にして、アジア研究者との交流を通して、東アジアの中での比較検討を行う。特に中国、韓国という同一の木造建築文化圏の建築様式の比較を行い、そのなかにおける日本建築の様式の特質を検討する。最終的には、東アジアの建築様式全体の構図の素描と、その中での日本の建築様式の固有性を把握することが目標である。
　具体的にはシンポジウムを開催して、積極的な討論を行う。

２．研究の進捗状況

（１）　シンポジウムの開催
　今までシンポジウムを 5 回実施してきた。内容は以下の通りである。
「日本住宅史と民家史を結ぶ」（平成 20 年 12 月 13 日）
「日本寺院建築史と住宅建築史の接点と境界－仏堂と住宅の邂逅」（平成 22 年 1 月 23 日）
「修復・再現と様式」（平成 22 年 3 月 30 日）
「民家の移築と維持」（平成 22 年 6 月 12 日）
「歴史的町並みの近代化と建築史研究」（平成 22 年 12 月 18 日）
　住宅史と民家史、寺院建築史と住宅建築史、修復・再現と様式、民家における移築と維持、保存的活動と建築史研究という、それぞれ別個に進められてきた研究の課題を、直接ぶつけて、方法の異動、異分野巻の類似の現象の

確認、などを探り、大きな成果を上げてきた。いずれも、記録集として取りまとめ公刊した。

（２）様式史に関する研究

中国・朝鮮半島の建築との比較研究では、宗教建築について、一部を実施し、その日本における特殊性を抽出しつある。中国においては、建築の様式が一つであって、その内部では意匠の上下が、社会的なランクを直接示す。朝鮮半島においても、ほぼこれに准ずる。日本においては、中国において最上位に位置する宮殿が、古代の一時期のみそうであり、他の時期には、寺院、城郭に取って代わる。また中国では、神社建築に類するものは廟建築であって、特殊な建築ではない。これはおそらく、歴史上幾度か起こった宗教弾圧などによって「淫祠」として排除されたものが、再度国家的な宗教政策のもとで、秩序化されて再登場したのではないか、と推定される。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

基礎的な建築様式の研究、シンポジウムを使った具体的な討論、中国・朝鮮半島との関係について予備的研究など、ほぼ予定通りの進捗状況である。おおむね順調に進展している。

４．今後の研究の推進方策

今まで実現していない、重要な課題について以下のようなシンポジウムを実施する。

「西洋建築史の様式×日本建築史の様式」
「中世の寺院建築様式×古代の様式」
「日本の建築様式×東アジアの建築様式」
「アジアの廟建築における様式の多様性」

今までは、対象を広げることに努力をしてきたが、今後はより根幹的なテーマを取り扱いつつ、東アジアとの比較論へと向かう予定にしている。

最終的には、シンポジウムを総計 10 回以上開催し、より広範な課題を提出する予定である。

５．　代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計　47 件）

１．光井渉「組物のかたちとその社会的意味」『歴博』査読無、159 号、2010、pp. 11-15、
２．後藤治「建築史学からみた創建時東大寺法華堂の建築に関する再検討」『ザ・グレイトブッタシンポジウム論集　東大寺法華堂の創建と教学』査読無、７号、2009、pp. 68-77、
３．溝口正人「三条白川坊熾盛光堂の由来と建築構成-住宅風仏堂成立の一側面」『芸術工学への誘い』査読有、13 号、2009、pp. 23-36、
４．川本重雄「天皇の座－高御座・椅子・大床子・平敷－」『家具道具室内史』査読有、1 号、2009、pp. 52-66、
５．藤井恵介「初期比叡山の建築に関する幾つかの課題」『仏教芸術』査読有、300 号、2008、pp. 45-53、
６．藤井恵介「日本人は中国建築システムをどう受け止めたか」楼慶西著、高村雅彦監修『中国歴史建築案内』TOTO 出版、査読無、2008、pp. 374-385、

〔学会発表〕（計　47 件）

１．上野勝久「日本における歴史的な都市と集落の保存」東京藝術大学・ボローニャ大学共同国際シンポジウム日本とイタリアの歴史的都市―その保存と変容―、2010 年 10 月 15 日、東京
２．大塚哲也・後藤治・吉澤政己「長野県東筑摩郡朝日村　光輪寺薬師堂について」日本建築学会大会、2010 年 8 月 24 日、富山
３．大野敏「知恩院御影堂内宮殿について」、日本建築学会関東支部 2009 年度研究発表会、2010 年 3 月 3 日、東京
４．平山育男「明治時代の天龍川流域における製材工場について」日本建築学会関東支部 2009 年度研究発表会、2010 年 3 月 3 日、東京
５．溝口正人「東アジアにおける日本の宮殿建築」国際研究集会日中比較建築文化史の構築-宮殿・寺廟・住宅-、2008 年 12 月 5 日、佐倉（国立歴史民俗博物館）

〔図書〕（計　30 件）

１．光井渉『都市と寺社境内－江戸の三大寺院を中心に－』、ぎょうせい、2010、96 頁
２．上野勝久『近世の芸能施設とその空間』ぎょうせい、2010、96 頁
３．藤井恵介、早乙女雅博、角田真弓、大西純子、吉川聡編『関野貞日記』中央公論美術出版、2009、605 頁
４．玉井哲雄、川本重雄、藤井恵介他著『日本建築は特異なのか―東アジアの宮殿・寺院・住宅―』国立歴史民俗博物館、2009、124 頁
５．大橋竜太、溝口明則、平山育男『コンパクト版建築史【日本・西洋】』彰国社、2009、256 頁